

夢もっとひろがれ

4

発行・編集
いぶき福祉会後援会

〒502-0907
岐阜市島新町5番9号
TEL. 058-233-7445
FAX. 058-232-9140
E-mail. ibuki@alto.ocn.ne.jp
(1部100円)



新年度を迎えました。



もくじ

- ② 後援会長あいさつ
- ③ 後援会総会のご案内
- ④ 見学会を行いました
- ⑤ 「シリーズ」私と息子といぶきと
- ⑥ いぶきの歴史を振り返る
- ⑦ ⑧ いぶき成人を祝う会
- ⑨ ⑩ 第二いぶき成人を祝う会
- ⑪ ⑫ 第二いぶき仲間のすがた
- ⑬ ⑭ 座談会…親亡き後その1
- ⑮ ⑯ ⑰ 新人職員紹介
- ⑱ いぶきまつり告知
- ⑳ 情報掲示板

暖かさを感じるようになってまいりました。
仲間とともに散歩をするたくさんの春の訪れを感じ、
自然と笑顔がこぼれます。
桜が満開になりこの春新たな門出を迎える方々を祝うか
のようです。いぶきでも新しい仲間と職員が増えました。
新しい出会いに力をもらい新年度スタートです。

2016
Spring
Vol.186

後援会長あいさつ

福祉と

アベノミクス

高橋 弦

異次元の金融緩和、機動的財政政策、成長戦略を三本柱とするアベノミクスは円安・高株価の誘導に成功し、輸出産業・金融界等に大きな利益をもたらした。しかしほとんどの国民には「好況」の実感がわいてこない、とはよくいわれる。それもそのはずで賃金水準は低迷したまま、かつGDPもここ30年間500兆円の前後を行き来するだけで上昇の気配はない。そうしたマクロ状況の中、一部の企業だけが大幅に儲けているとすれば大多数の国民には労働分配率の悪化や格差問題の深刻化というかたちで

しわ寄せがやってくる道理である。

さすがに新三本の矢では2020年までに600兆円のGDP、出生率1.8、介護離職ゼロを目指すという。強い経済をベースに子育てに苦勞する若者や介護にあえぐ中高年への支援を意図しているように見える。従来とは異なつて保育園の新設や老人ホームの建設にも前向きなポーズをとっている。だがアベノミクスの政策から受ける印象はどこか福祉の精神とは両立できない違和感を覚える方も多いと思う。

なぜだろう。安倍政権の目標・課題が自主制定憲法(日本国憲法の改正)にあることは周知のことだろう。解釈改憲の手法で集団的自衛権の

行使容認、安全保障法案の強行突破と戦後70年の平和主義外交を「現実的」の一語で片づけ、戦争できる日本へとベクトル転換させようとする。たしかに21世紀アジアの政治構造は危険な様相を強めてはいるものの、それへの対処なら個別自衛権の範疇で可能ではないだろうか。国民の生命と安全を守るという名目の下、現行憲法無視の「国防軍」創出に邁進する政権が掲げる福祉政策は国民を政府に吸い寄せるための方便にすぎないのではないか、という危惧を禁じ得ない。それは政権の福祉対策がアベノミクスなる経済成長至上主義に矛盾なくリンクしうるのだろうか、という疑問にもつながっていく。福祉重視は目標であつて方便ではないことを肝に銘じよう。

いぶき福祉会 後援会総会の お知らせ

お知らせ

平素は、いぶき福祉会の活動にご理解とご支援を賜わり、厚く御礼申し上げます。さて、平成28年度後援会総会を左記の通り開催いたします。

ご多用の折とは存じますが、万障お繰り合わせの上、是非ともご出席くださいますようお願い申し上げます。

日時

7月3日(日)

午前10時～12時

場所

日光コミュニティセンター 大集会室

岐阜市日光町9-1-3

施設見学会を行いました

通信1月号でもお知らせしていましたが、3月16日(水)に後援会員向けの西部事業部の見学会を行いました。これは、日ごろお世話になっている後援会員の皆様に実際の様子を見ていただく機会を設けようと昨年から実施しています。当日は30名ほどの後援会員の方々にお越しいただき、西部事業部の概要説明の後に、「いぶき」

「ゆめくるん工房」、「きざはし」の順に見学していただきました。主に仲間たちが実際に仕事をしている場面を見ていただきました。ここ数年で事業所がたくさん増えたので初めて見る方が多かったです。皆様、熱心に見学していかれ、とても温かい雰囲気で見学会を行うことが出来ました。

以下に参加いただきました
通信1月号でもお知らせしていましたが、3月16日(水)に後援会員向けの西部事業部の見学会を行いました。これは、日ごろお世話になっている後援会員の皆様に実際の様子を見ていただく機会を設けようと昨年から実施しています。当日は30名ほどの後援会員の方々にお越しいただき、西部事業部の概要説明の後に、「いぶき」

た方の感想を抜粋して掲載させていただきます。

○初めてお伺いしました。学ばせていただきありがとうございます。市内の病院に勤めておりますが皆様の表情が良いのでうれしかったです。

○事業が大きくなっている。知らなかったので驚きました。北部の見学会もぜひ参加したいと思っています。ありがとうございます。

○作業場の広さがあった。よかった。みなさん生き生きと働いている様子がよかったです。

○初めて伺いましたが一人ひとりに目をかけていて感心しました。

○二十周年の時には他の職員が参加させていただきました。初めて直接見学することができてよくわかりました。利用者さまの

ニーズや実態に合わせて事業を拡大されておられるのですね。今後ともよろしくお願ひします。

○第二いぶきに子供が行っています。島いぶきの方は見たことがなかったの。こういう機会にみれてよかったです。

○小規模の特性を活かし、地域と密着した施設であることを実感しました。職員・ボランティアの方の人数も多いようで、一人ひとりに合った支援であると思いました。本日はありがとうございました。

○見学させていただきありがとうございました。いろいろな施設がありすごいと思います。今後いろいろ取り組みたいと思いますのでよろしくお願ひします。

○地域に根ざした施設だとすぐ思ったのと、働く場生活の場として環境を大切にされているのを感じさせてもらいました。今後の支援に向けて、いろいろ考えて

ていきたいです。ありがとうございました。

○地域の住民の方の理解があり、近い所でいろんな場所がありすごいなと思いました。

○地域に根ざし、どんな障害が重い方も受け入れ発展してきた「いぶき」の様子がよくわかりました。地域の方々に感謝ですね。

○以前と比べ、ゆつたりと明るい感じがとても良い印象を受けました。地域のたくさんの方の理解があることはとても素晴らしいことだと思いました。

○たくさんの方がいきいきと働いているので、すばらしいと思います。説明がわかりやすく、初めての見学でしたが楽しくすごすことができました。テレビ

でかきんとうの販売をしているのを見聞きして最近知りませんでした。とても良い見学ができました。これからも、頑張ってください。



○以前見学した時は廊下に物がたくさんあふれていました。それが明るくなり利用者もよい感じがしました。ひとつひとつがゆつたりとしていてよかったです。

たくさんの方にお越しいただきましてありがとうございます。今回は西部事業部のみでしたので、6月8日(水)に北部事業部の施設見学会を予定しております。よろしければご参加ください。

シリーズ

私と娘といぶきと



昭和五十六年五月三十一日午後四時頃長女が、その十五分後二女、恵が誕生しました。そうです。恵は双子の妹なんです。

双子だということは、妊娠五ヶ月目の検診時に産科医から知らされていました。

それを聞いた時は、無事に出産できるかという心配と、同じ顔をした二人の子供が生まれてくるうれしさと、期待とがありました。妻も私も女の子を望んでいたので希望通り女の子が誕生したことを大変喜びました。

しかし喜んだのも束の間でした。

生まれたその日の夕方、医師から呼ばれ、二人共に目に異常があるのでは、と言われたのです。それから一週間程して受

診、結果は二人共先天性緑内障と診断されました。乳児の場合は眼圧が高くなるため、眼球が肥大し黒目部分が大きく、牛の目のように見えるため牛眼と呼ばれます。治療は、手術するしかなくたとえ成功してもその予後は不良とのことでした。こうして病気の闘いが始まりました。

まず診断された病院へ



二ヶ月程入院、手術しましたが結果は良くなり、退院後しばらく通院しましたが、この病院をあきらめ、知人の紹介で知った名古屋の眼科へ転院しました。

この病院の対応は早く、すぐ入院し手術してくれ、結果眼圧も下がり落ち着いた状態になりました。

しかしこれで治療したわけではなく、その状態を維持するための入院の繰り返し、検診のための通院。現在の半年毎になるまで、三十五年間ずっと続いています。

病気の話が長くなってしまいました。

さて恵のことですが、目の病気に気をとられ他の障害に気付くことが遅れてしまい大変悔やまれました。

姉妹も小学校入学の年齢を迎え、姉は目の障害だけでなく、状態も良く、問題なく地域の小学校へ入学できたのですが、恵は養護学校入学を勧められました。

しかし私たち夫婦は地元

の小学校への入学にこだわりの、恵を連れて小学校の養護教室を何度か訪問し担任の先生に恵の状態などを見てもらい、小学校入学も問題ないと言ってもらい私たちもホッとしたものです。小学校、中学校と地域で過ごし、高等部は中濃養護へ入学、この頃には視力もほとんどなくなっていました。が担任の先生が、恵がとても器用なことに気付いてくれ（親は気付いていました。）織物や陶芸などいろいろなことに挑戦させてくれ、それが今の恵になったのだと思います。

高等部を卒業後第二いぶきへ入りました。

いぶき福祉会の存在は意外と古く、小学校の先生がいぶきの法人化の応援をしていたことで知っていました。

小学校の時から、いぶきへ入ることが決まっていたのかもしれないね。

いぶきでも器用さを発揮できているようで、うれしく思っています。



恵はとてもやさしい子で、家族の面倒をよく見てくれるのですが時にうつろいしいと思える事もあります。そんな恵もパストラルへ入所して週末にしか会うことができずに寂しいことです。しかし私達親の仕事が終わったわけではなく、眼科への通院など今後もずっと続くことがいろいろあります。

いつまで続けられるかわかりませんが、一日でも長く生きていくことが、親の義務だと思っています。

今後はいぶきの仲間、パストラルの仲間、職員の皆さん、たいへんお世話になることとおもいますが、よろしく願います。乱分乱筆お許しください。

恵の父ちゃん 馬淵壽



法人20周年記念誌の製作に携わらせて頂き、歴史を振り返る中で、小規模時代から行っているハローバックの下請け作業に取り組んでいる風景の写真がありました。私はいぶきに入社して2年目ですがハローバックという仕事の事について写真をみるまで知りませんでした。記念誌製作をしている中で、昔はハローバックの仕事をしていたことや、今もその仕事は一部の部屋で続けられていることを知り、どんな風にハローバックの仕事に取り組んでいたのか気になりとりあげました。

今回、長年ハローバック

の仕事に仲間と取り組んできたいぶきの横幕さんにご協力頂きハローバック

の仕事について当時の様子を聞くことができました。

ハローバックの下請け作業は1984年のいぶき共同作業所開所以来行っている仕事で、この仕事を始める前は、仲間に向う仕事が多くなかなか見つからず、洗濯バサミ作りや商店街のアーケードに飾るかざりのセット作りを行っていました。また、お金になる

いぶきの歴史 その十二 ～しごと・ハローバック～

ことがなかなか難しく、いろいろな仕事に取り組んでいました。そんな時に近所の方に声を掛けていただき、ハローバックの仕事が始まりました。袋が適度な大きさで50枚単位の入荷量、出荷量だったため仲間達が出来た量を把握しやすく、達成感を味わうことができました。

当時の仕事の流れはワゴン車いっぱいに積まれた紙袋が毎日届き、1日でそ

の仕事をほとんど仕上げ、夕方回収するという動きでした。仲間が1列になり、バケツリレーのように袋を搬入し壁一面に袋が積み上がるほどたくさんの方の仕事がありました。内容としてはPP等のひもつけを行っていました。この仕事は今も行われています。また、現在は始めた頃と袋の量が格段に減っています。そこには、もともとひもの

ついている袋が多くなってきたことや、エコバックの利用が多くなってきたことが背景にあります。そのため今は紐通しに加えて、機械ではできない口折りの仕事や口芯付けの仕事も組み合わせてやっています。長年行ってきたハローバックは今も仲間の暮らしを支えている大切な仕事の1つだと感じます。

ハローバックの仕事をしている仲間のエピソードを



一部紹介したいと思います。

いぶきに入るまでは周りからお世話されることの多かった竹中均さんですが、たくさんハローバックの仕事を行うなかで重要な存在になりました。給料をもらうことの喜びや仕事を任される嬉しさ、やりがいを感じ、当時は紙袋に通すひも10束ほどを家に持ち帰り、そのひもの結び目を作って翌日出勤したそうです。(1束は袋50枚分、10束だと1000本ほどになります。)仲間達はそんなハローバックの仕事が大好きで、家に持ち帰るほど気に入っていました。

当時の写真を見て、袋に

ひもを通し、細かい作業を1つ1つ丁寧に行っているのだなと感じます。また、集中力や根気よく取り組むことが必要な仕事だと感じました。袋が入荷されると「今日も頑張ろう!」という気持ちになり、1日の仕事を終え、出荷されるところを見ると達成感や喜び、やる気につながるのだと感じます。また当時は多くの仕事がありながらもダムのニースをみている思い立つて徳山村に外出することや、近くの公園で花見をしながら一緒にビールを飲むこともあったそうです。形式にとらわれず仲間と職員があらままでふれ合っていたのだと感じます。

現在は様々な部門に分かれて仕事をしています。が、その中で仲間と関わり一緒に1つのものを作っていく喜びを感じています。そして仲間1人1人が社会の中で生きがいを持ち、楽しく生活できるよう支援することができたらいいなと感じます。

いぶき 仲間のすがた 成人を祝う会

いぶきでは、今年度、5人の仲間が成人を迎えました。ふじの山田雄太さん、ソレイユの中島大和さん、ファームの三宅志歩さん、サテライト

の川口舞さん、高力裕也さんです。
1月9日(土)日光コミュニティセンターで来賓の方をお迎えし、成人を祝う会が開催されました。



みんなの大きな拍手の中、すこし緊張した面持ちで新成人が入場しました。生い立ちビデオの紹介が始まると、スクリーンをじっと見つめ、興味深く見入っていました。幼少期や、学校時代を振り返り懐かしく感じていたのでしょうか。この生い立ちビデオは生まれた時の写真、家族との団らんや、学校時代の写真などそれぞれが思い出のある写真を持ち寄り、担当職員が編集させていただきました。



になった先生より、お祝いの言葉をいただきました。学校時代のエピソードをおりまぜて、新成人の紹介をしてくださいました。二十歳を迎え、一回りたくましく、大人になった新成人の姿を見て、先生方の感慨深い表情が印象的でした。人が集まる場所がちよつと苦手な仲間も、お祝いの言葉には笑顔がこぼれ嬉しそうにしていました。

花束贈呈では、ひとりひとりが感謝の気持ちをこめて、保護者の方



花束をプレゼントしました。「お父さん、お母さんありがとう」「これからも仕事を頑張ります」など、それぞれの思いを精一杯伝える姿が見ら

れました。緊張や不安な気持ちから、涙が出てしまった仲間もいましたが、そばで見守ってくれている保護者の方を見て、安心した様子でゆつくりと「あり・が・と・う」と感謝の言葉を伝えることが出来ました。花束を受け取った保護者の方も、はつきりと感謝の気持ちを表現できる成長した新成人の姿を見て、

涙を流している方もいらつしやいました。

保護者の方から会場のみんなへの挨拶では、学校時代には苦勞することもあつたけれど、いぶきに入ってからはおたくさんの仲間と一緒に作業をしたり楽しく生活したりすることが出来て、本当によかったとしみじみと語られました。会場全体がとても暖かい雰囲気になられて、私も胸がいっぱいになりました。

最後に、いぶきの仲間自治会会長の伊丹さん



が、「いぶきで働く先輩として、また一緒に働くなかまとして、これからもみんなと一緒に仕事を頑張っていきましょう」と、お祝いの言葉を述べました。

成人を祝う会を開催するにあたり、新成人の仲間には緊張もあったと思いますが、しかし、この会には堂々とした姿で臨むことが出来ました。一人ひとりが新成人としての心構えを持つて参加していたからだと思ひます。そして、新しく成人を迎えられたという節目の一日が、本人



や家族にとつて忘れられない大切な日となつたことでしょう。

皆さん、本当におめでとうござひます。これからも、みんなで一緒に助け合ひ、笑い合ひながら楽しく過ごしていきましょう。

サテライトいぶき
岩井香名



第二いぶき 仲間のすがた 成人を祝う会

第二いぶきは、今年度岩本彩那さん、吉田光佑さん、牧野祐己さん、津田安優美さん、西澤美里さん、

木澤佳子さんと6名の方が成人を迎えました。新成人の人数が増えていることもあり



今年の成人を祝う会は会場を改め、美山中央公民館を会場に恩師の先生やご家族、なかま、職員、保護者の方々、多くの方に囲まれ盛大に行われました。式典を行ったあとは第二いぶきのそれぞれの部屋にもどり、いつも一緒に仕事をしている慣れ親しんだなかまから改めてお祝いを受け、おいしい昼食を食べながら過ごしました。

■岩本彩那さん

赤いかわいい振り袖姿での出席！まわりのみんなからの声にニコニコでした。控室では恩師の先



生やご家族に囲まれて特別な1日でした。食事の時もいろいろのなかまにお祝いされ嬉しそうでした。

■吉田光佑さん

久しぶりの恩師の先生との再会に嬉しそう。お母さんや恩師の先生の言葉を聞いてうなづいたり笑ったりと楽しそうな一面を見せてくれました。当日はスー



ツ姿でビシッと決めてくれました。第二いぶきに帰ってからは家族と職員との昼食、会話を聞きながら楽しみま

した。

■牧野祐己さん

懐かしい恩師の先生の話をしっかりと聞いていました。くす玉割り、生い立ちDVDなども自分の番になると嬉しそうにニコニコしていました。仲の良い後輩の矢川さんからお祝



いの品をもらうと、ひと際嬉しそうな表情をみせていました。第二いぶきに帰ってからは大好きな嵐の曲を歌っていたそうです。

■津田安優美さん

式当日が来るまで楽

しみであつたり不安であつたりとそわそわしていた津田さんでしたが、式中は終始ご機嫌。映像やくす玉とお祝いムードを楽しんでいました。恩師の先生から好き嫌いをしないようにね！といわれ学生時代を思い出してかしぶしぶ返事……と会場の笑いを誘う場面もみ



れました。

■西澤美里さん

式が始まるまでは少しうとうとしていましたが、入場してからはバツチり起きて参加でき

ました。当日はお母さんが編んでくれたシュシュを着けネイルやスカートでおめかし！大人の女性の服装で参加



していました。

■木澤佳子さん

成人式にむけて見通しを持っていたようで当日は自分が主役ということをすっかりわかっていました様子！堂々と参加していました。成人を祝う会の為にお給料を貯めてレッグオーマーを買いました。とても似合っていましたよ。こらぼにもどつてからも

みんなにおめでとうと言われて「アハハッ」と声を出して笑っていました。



第二いぶき 加納優汰





第二いぶき 仲間のすがた

織部さん

70歳

織部さんは長い在宅生活を
を経て、2004年、週に1回のデイサービス利用を開始し、これまでにグループホーム入居、毎日通所開始と劇的に利用形態が変わってきました。コラボーいぶき通所当初、野球をしたり、ギターを弾く真似をして止めるまで踊り続け、仲間に

対してもやさしく声をかけたり、いけない事には「こらっ!」と怒ることもありました。そんな元気で気さくな織部さんでしたが、年齢を重ねる中で徐々に心身機能の低下があらわれてきています。2012年頃から歩行が困難になり、体が不安定になる状態に恐怖心があるためか、体を動かすことへの拒否がみられるようになりました。日中生活の中で疲れも目立つようになり、身体的な負担が軽減できるよう、ベッドで横になって体を休める時間を大切にしてきました。しかし、休憩時間を増やすようになつてからも体を動か

す拒否感は変わらず、以前のようには好きな仲間を気にかけてたり、ジェスチャーで遊ぶことが少なくなっていました。織部さんが抵抗感なく自分から楽しんで体を動かすにはどのような支援が必要か、仲間と楽しく関われるためにはどういった環境づくりが必要かを課題に挙げ支援に臨みました。理学療法士より、横になる時間が増えると身体機能がどんどん落ちていくため、日中は負担のない程度に起きて体を動かし、夜はぐっすり眠れる生活リズムが理想的であるということ、体の機能回復を目指すのではなく現状維持に重点を置き、今日できたことを明日もできるようにする取り組みを大切にしてほしいとアドバイスを受けました。確かに休む時間が多いと

ぼんやりと過ごしてしまふことになり仲間への関心や活動への意欲が湧きにくいのではないかと思います。少しずつ体を起こす時間を増やしました。しかし、車椅子に座って過ごすだけでは眠気が出てきてぼんやりと過ごしてしまふことがあるため、ボール遊び、絵を描くなど、手を使って物事に集中してもらうことを大事にして過ごしてもらっています。遊んでいる時は体を動かすことに抵抗感なく楽しめ、笑ったり悔しがったりと様々な表情がみられます。こういった織部さんが体を動かすことへの不安感を忘れることができるような取り組みをこれからも大切にしていきたいです。また織部さんさんは体が固く、マット上ではリラクセスした姿

勢がとれないため、一日のほとんどを車椅子やベッドで過ごしています。そのため、マット上で過ごす仲間と視線の高さが違い、距離感が生まれやすい状況です。そこで、この数年間マットに下りたことがなかったのですが、少しでも他の仲間と視線を合わせ、距離を近づけられるように、マットに下りることに挑戦し始めました。音楽療法、リフレクソロジーなど輪になつて活動す



る場面では、座椅子を使用し、織部さんが安楽な姿勢を保てるように気をつけて取り組んでいます。仲間と視線が合わせやすくなることで、取り組みも以前に比べより一体感が持てるものとなってきました。

高齢期にいる織部さんはこの先、さらに体を動かすことがつらくなってくると思われます。これから無理なく楽しめる取り組みを織部さんと一緒に見つけていきたいと思っています。また、織部さんが安心して充実した生活を送ることができるように、いぶきでしかできないこととは何かを皆で考えていきたいです。

第二いぶき 河波宏実

仲間のすがた を読んで

いぶき 伊藤 慎悟

私の知っている織部さんの日常は、一昨年グループホームを担当していた時のものなので、色んな人に入院したことがありまして、誤嚥性肺炎と診断された。一週間程度入院されましたが、今思えば、老いが深まっていく最初の兆候だったと思います。病室のベッド脇で、心配を抱えながら見守る私達の元へ、織部さんのお兄さん、お弟さん、お嫁さん、最後にはお母さんが駆けつけてくれ、お母さんが笑顔で「頑張つてね、かずちゃん」と励まし続けてくれていたことを

思い出します。その時、御家族の笑顔が今まで織部さんの人生を力付けてくれていたのだと実感しました。

思えば織部さんは、終戦前に生まれておられるので、岐阜の空襲も経験して、戦後の困難な時代を



には、これからも無理なく楽しめる取り組みと一緒に見つけていきたいとありますが、織部さんが過ごすこれからの一年は、今までの時間の流れ方とは、かなり異なってくると思われますのでその点に留意した取り組み

にする必要があると思いました。

というのも、私は高齢施設での勤務経験があり、このことを踏まえて考えることがあるからです。一見、お年寄りのはのんびり過ごしているイメージがありますが、実際には今まで出来ていたことが出来なくなったりするこ

とに対して、もどかしさや大きな不安感を抱きながらも必死に一日一日を生きておられます。寄り添う私達スタッフは、皆さんの長い人生に訪れた「老い」というものが、暗く心配なものではなく、できる限り豊かなものとなるように四季折々のレクリエーションや外出活動、体操などを考え実施しました。そして取り組みの中からでる自然なお年寄りの笑顔が私達スタッフの励みとなりました。織部さんについても、「老い」への不安に配慮したいなと思います。

そうすれば、織部さんのアルバムや所内通信にも笑顔の写真が多く有りますから、きつと周りの人をその笑顔で元気付けてくれることになるでしょう。そして、その笑顔をこれからもずっとつと見続けていたいと思ひます。



林 4月からの紙面刷新に際して、懇談会をやるうということになり第1回は親さんに来ていただいて「親亡き後」というテーマで話し合っていたかどうかと思います。

座談会

※今回は4回シリーズの1回目です。

親亡き後について①

出席者

林…法人副理事長(進行)

前川…父親の会世話人

大野…いぶき保護者会会長

土田…第二いぶき保護者会会長

池田…西部事業部長

古くて新しいテーマですが、少し整理しておきますと、戦前は大きな施設もなくある程度コミュニティがあったので地域の中で障害のある方を最期までみてきました。戦争に突入していつて、障害のある方はひどい権利の侵害が行われていたということがありました。戦後、法律できて、また高度成長だったので、労働力を市場に出さなければいけないということで、政府の方針として、大型入所施設を沢山つくりました。学校を卒業

するとそういった所に入つて一生を終るといふことだった。入所施設に入ると衣食住、最期の葬祭費まで全部国費で出されて、生きていく事は保障されていました。そういった状態の中で、ノーマライゼーションの中で、考え方が出てきて地域で住むべきだということになって、私達のような通所施設がどんどんできてきました。国の方針としても入所施設はもうつくりたくない、通所と暮らしの場ということをやつていこうと方針転換しました。しかし、今暮らしの場がないのです。グループホームという住形態も出てきたが、僕はあまりいい形だと思つていない。ノーマライゼーションの考え方からすると、集団で暮らすという形はあまりないのではないか。はたしてそれは仲間たちが望んでいる

暮らし方なのかなと思うと、どうなのかなと思う。また、国の方はどんなグループホームをつくれと言ったが、やっぱり財政抑制策でなかなか増えていかない。民間の住宅を改装したり、公営住宅を使って広げろと言っているが、住宅政策や消防の関係や、いろんな足かせがあつて、なかなか進んでいかないというのが実情なのです。用途変更と言うことで普通の家を利用する場合、スプリンクラーをつけるなど、大規模な改造がいります。とてもじゃないが間尺に合わない政策なのです。また、今は職員も集まらない。いくら募集しても誰も来ない状況で、この状況はもつとひどくなつてくると思ふのです。今親亡き後ということは、全ての障害をもった方の親に関わることで、通所に

通っている方が全国で9万人くらい居るので、その障害者全員に、今後この問題は絶対出てきます。それに対する政策がうちだされていない。いぶきが運動して今までやってきたが、こういうような運動でいいのかとか言うことも含めてざつとくばらんに話し合いたいと思つています。今入つてみえるのがこの中では大野さんだけです。

大野 はい、うちはグループホームではなくケアホームで利用をしました。

林 現在は一本化されてグループホームになつて、ケアホームと言う言葉は無くなりましたね。

林 どんどん、親亡き後の日が近づいてくる。親の中でも10年前は「いや、兄弟にみてもらう」とか、「大丈夫です」と

言っていたが、やはりいざとなると、難しい。高齢者問題とは違った大変さがある。兄弟、おじさんお婆さん、姪っ子甥っ子しか居なくて、その下に直系が居ない状況で、どうやってその人の地域生活を支えていくのかということが非常に問題になってます。明日そういった日が来るかもしれないから、そんなにのんびりもしてられないくて。いぶきは今までそういう事があつたときに「どろなわ」と言えるかもしれないが、何とかしてきた。急にお母さんが亡くなられて、うちが空いている部屋をとにかく緊急に開放したり、シヨートに繋げたりして、ホームはつくった。うちもホームいっぱいなので駄目です。といったらどうなるのか。やはりそのような事も、みなさん共通にあり得

る。グループホームというのは、行政としては、ものすごいお金がかかるのです。入所施設は50人で夜2人の職員体制でしょ？グループホーム 50人分の施設をつくったらものすごい人件費がかかるから、行政としてもグループホームをこれから山ほどつくるようなことは多分しないと思う。

土田 ヨーロッパの真似をして小規模になつてきたのに、また大規模になつていくということですか？結局やつぱり戻っていくのですかね？

林 昔はどんな施設をつくっていたが今は全然違う。グループホームというのがこれから本当にどんどん増えていくというようなことはないと思う。

土田 今あるグループホームはそのままでもいけるのですか？

林 非常にいろんなもつと安上がりになるような、例えば軽度の人方は見周りだけでいいみたいなホームだとか、そんな政策が増えてくる。

土田 私たちはまだケアホームと言っているでしょ、パストラル。大野さんが入っているところをグループホームと思っていたし、パストラルは経営が赤字と思っていたし。赤字の状況で次のホームができるのかとか、そういう心配はずつとしていたのだけど。グループホームは夜勤というよりは宿直で、パートの世話人さん一人だから何とか運営的にはいいのかな、と思つたのですが。基本的な生活習慣が出来る子達はそのような所で世話人さんでなんとか経営的にもいいのかな、と思つていたのですが、そうでもないのですか？

林 うちでは重度の方のホームをつくつたでしょ。周りにもどんどん増えてきています。そうすると、今の施設ではお金がかかるからどうするかという話になってきています。

結局グループホーム自体が厚労省の考え方は、最初は一般就労している方の住まいとしての住宅を供給するみたいな制度で、重度の方が地域で住むための資源としてという考えはなかった。もつとと言うと65歳問題があつて介護保険に移れる人もどんどん移つてくれと言う。なので、グループホームに入っている人も65歳になつたら老人のホームにというような流れもでてくる。

土田 パストラルに入る時、みんな終のすみかと思つていました。65歳過ぎたら老人介護のほ

うに行くのですか？みたいな感じの不安はみんなあつたんですけど、やつぱりそういう方向に行くのですか？

林 国の方針としてはそうですね。

土田 制度が変わりすぎて、わけがわからな。ついていけない。

前川 グループホームを政策としてつくつていかないという傾向の中で、例えばきょうせんとかいうのは、親亡き後の政策はどういったことを思っているのですか？

林 今、きょうせんでは実態調査をしていて、どのくらいの人があるのかという調査をしている段階で、最後の住み方というのは多種多様じゃないですか。だから、あまり画一的な制度としてではなく、いろんなものを組み合わせた制度、例えば自宅で住

んでヘルパーを利用して生活するとか、気の合う仲間とルームシェアリングをして、そこでヘルパーをつかってやるとか、いろんなやり方があるだろうとを今模索している。やはり入所施設というのは、とても権利性からいうと自分の住みたいところに住みたい人と一緒に住むという権利条約の理念からしてもいけないだろうと思います。昔は入所施設を収容施設と言っていた。そういうところからいきなり地域へ出ろと言われても、資源がないなかで出されても生きていけない。これから多種なものをつくっていくかなければならない。地域性もあるだろうし、非常に悩ましい問題です。通所施設をどんどんつくってきて、何十年後にこの日が来るというのを分かつていたのだけど。

前川 それは調査中というの、どれくらいを目途にして方向を出されるのですか。

林 結局、これはきょうされんだけやつても仕方ないもので、いろんな障害者団体と意見をすり合わせやりながらだから、まだ時間かかると思うけど。その間きょうされんとしては、何とかしていくという覚悟はある、きょうされんらしく、それは運動で地域に制度をつくっていたりしながら、きちんとした国の責任を追及して最終的には国の制度として整備しなければいけないということですね。

前川 とりあえず、僕たちのように70になつてくると、親亡き後というのは明日かもしれないという現実問題。10年とか20年前の若い頃には、そういうことは一つの課題としては考えていた

けれど、現実問題というとまだ感覚的に薄かった。それが、現実そうなつてくると、国がやっている政策に対してやはり、批判するのだつたら、それなりに対案をいうのをきちゃんと出されて、なおかつそれを実現するまで間はそれぞれの作業所でこれくらい努力しますということだつたら分かるけれど、おおもとが無いと、訴えていくにはちよつとインパクトないですね。

林 それ、グループホームなのです。みんなが必死になつてグループホームをつくって、拡大しているのはきょうされんくらいです。それをやりながら僕はグループホームを整備できればもう終わりと言うことではないと思つていて、色んな地域のボランティアもつかうし、ヘルパーや重度訪問介護など

の制度を拡充しながら運営、経営している。従来のグループホームの制度では絶対無理だから。そんなようなことをやりながら、どの障害者施設もみんな抱えている問題を解決していかなければならぬと考えています。

前川 全国の障害者も同じ問題を抱えている。一緒だと思ふ本当に。

林 いざという時「うちはグループホームがない、又は定員がいっぱいですからごめんなさい」と言われるとどうなるかと言うと、市役所の窓口に行くでしょ？探してはくれるのだけど、「離島の入所施設が開いていますよ」とかね、山の中とか。結局「どうされますか？」という対応しかないものだから、そんな年をとつてから全く知らぬ土地に行くのは子どもにとつてスト

レスなことだし、親からしても可哀相でとても応じられない。

前川 現実問題でそんな選択肢はあり得ない。

土田 有り得ないよね。

林 市は、本人に意思決定ができないから、行政措置となり全国の入所施設の空きを調べる。空きが出るということは亡くなるということなのです。定員を増やさないから。いきなり送られて捨てられたみたいな感じ。

土田 それはちよつと…なんか、始めからそんなシヨックな話を聞いたら…なんかシヨックでいま。いぶきがお手上げ状態だなんて…

林 国が地域へ地域へと言っているものの裏付けがなかったということですね。地域へ出るということは、入所施設に居るより悪いことではないと思うのだけど。ただ

地域へ出すといつても住
資源がないのだから、そ
れをいま内閣は共助と
か共に助け合うとかそ
ういった言葉を出して
いるのだけど、それは無
理ですよ。

土田 ね！だから結局
お金の問題。お金がない
ということが一番悲し
い。ショック…

前川 僕は、やっぱり大
きな目で見ると、絶対
お金がないということ
はないと思う。

前川 お金はあります
よ。

林 使い方です。

前川 これだけの日本
の豊かな生産性をもつ
て、GDPだって高いわ
けだから、使い方が違っ
ている。

林 そういうことです。

前川 そのところだ
け、きちんと主張してい
かないと。お金が無いと
全て我慢しなければい

けない形になってしま
うから。

林 日本はOECD先
進国の中で障害者予算
が最下位に近い。せめて
真ん中くらいにしてほ
しい。予算の総枠は決ま
っていて、羊羹を切り分
けるようにどこかを拡
充していくならこっちを
減らしてくれという話
になっていきます。引ッ張
り合いになる。分捕り合
いが始まるから、それは
いけないと。予算そのも
のを大きくしないと解
決しないのです。今それ
が減っているのです。障
害者施設の予算は自然
増の半分5000億に
なってしまうと、これは
本当にきいてきますよ。

前川 これは親として、
障害者を抱えた親とし
ては、親亡き後のために
も、政治の責任が大きい
という事は主張しつづ
けないといけない。た
だ、それだけではやって

いけないから、もう一つ
の方法として、それに対
してどういった手当が
できるのかというは論
議していかないといい
けない。このおおもとが抜
けてしまうとお金ない
から全て私たちがやら
なければいけない。展
望がなくなり苦しい
ことばかりになってしま
う。

林 私たちの市の要望
にも一番最初に国に働
きかけて下さいと挙げ
ている。また、自己負担
の問題がまだあつて、み
なさん今利用料はほと
んどゼロでしょうでもあ
れはまだ経過措置なの
です。かかった費用の9
割を国が出しますとい
うことで、1割について
は何も言っていない。今
は省令で1割を上乗せ
しているのだけど、法律
では9割しか支給しな
い。

前川 ちょっと一時期

負担があつたね。ほんの
少しね。

土田 あつたあつた。短
かつたけどね。

林 世帯分離したり。

土田 世帯分離した
よ、わざわざ。

前川 あのととき1万い
くら請求されたもん。

林 あれで、本当に通
所の人とか、もらう給料
より利用料が多い人が
出てきた。給料よりた
くさんの利用料を払わ
ないと通えないならや
めるといつてやめた人も
いた。自己負担を認め
たら障害を自己責任と
いうことを認めたこと
になつてしまう。障害が
あるうえに自己負担が
あるわけでしょう。とい
うことは、障害は自己
責任という考え方だか
ら、あれは絶対に守らな
ければいけない。皆さん
の責任ではない。責任を
取る必要はない。

前川 本当にそうです

よ。日本全体が格差社
会で食べていけない人
が増えているという流
れが極端に増えてきて
いるから、そういう影響
が障害者の運動のなか
にも出てきている。

林 年収200万以下
の人もいっぱいいるんだ
から、障害者も少しは
我慢してくださいと言
い方をするのだけど、障
害のための負担は性格
上違うから。別に多く
を要求しているわけ
ではなく自己負担をゼロ
まで戻してくださいとい
う運動を僕らはして
いる。障害があるとい
う理由で余分に払う必要
はない。そういうのをき
ちんとともに据えてお
かないと間違つてしま
う。政治を変える運動
と、今ある制度を最大
限につかつて、現状があ
るわけだから。運動ば
かりしては壊れちゃ
うから。その両面をきち

んとやっついていかないと。
土田 親御さんを亡くした子どもさんが入っているグループホームがあるのですよね。いぶきはそういうふうにいるけど、そろそろまわりのお母さんも、親が病気とか色んな困難な事が出てきている。いまだに送迎もやっってもらっていないのだけど、そっちの人の送迎に迎えに行く。結局私たちは元氣なので後回しになる。それは仕方ないかなとは思っているけど、いぶきが一生懸命にやっってお手上げになる状況。どこまでそういったお母さんたちをフォローしてあげても、次から次とそういう人たちが増えていくような現状で、限界になってきているような気がする。それこそ、まわりで特に大きな問題を抱えて人は皆さんはいぶ

き以外のショートステイをあちこちつかっている。親も心配になつて動き出した。いぶきではないところでショートステイをお願いして慣れていつて、いぶきではないところにいづれ行かないといけないのではないかとという不安がある。私もいぶきでは無理かもしれないと他のショートステイで子どもに練習させている。それは絶対いぶきにお世話になるのがあるが、いぶきで職員の手が足りないのあればやむを得ない。みんなが、あちこちあちこちショートステイでお世話になれるよう動き出した状況ではあります。一番困っているのは自閉症の強い子の親さん。私のところも多動なので、やっぱり病弱なところもあるし、てんかん発作もあるし重度なもので、ちよつと向こうであまり快く受けてくださっているのかな？というのを感じるし、他のお母さんたちもやっぱりそういった所で受けてもらうために、気を遣いながらショートステイを利用したりしている。自閉症の強い子たちの親さん達は家でも本当に大変な思いをしているのです。そういう親たちは、50代にもなると病気がちになるのですよね。40代のときは病氣にもならず元氣に居たのですが、50代になるともう本当に病氣が……

大野 そうなの、本当に……
土田 私いつも入院したらどうしようってそろそろ思う。年になつてきて、50代になつたらみんなそういうふうなふうに思つてショートステイとかも考えるようになったのです。60過

ぎたら私は今度自分が死ぬのでは。母の介護も10年くらいしていたけど終わつて、その時はやっぱり必死で、娘の将来とか漠然とは親亡き後の心配はしているのだけど、まだ切羽詰まった気持ちにまでは至らなかったのが、親を送つて、今度自分がこの世に何年居られるかと思うようになったり、明日癌だと言われたら明日から治療に入らないといけないかもしれないと思つたり、そういうことを思うようになって60過ぎたら、それこそ置いていかなければならないうということが現実になつてきなのです。



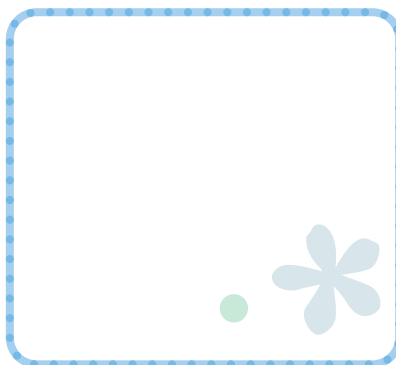
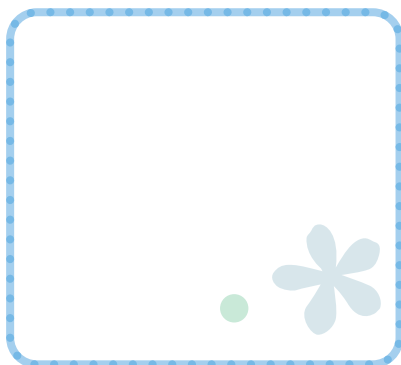
パストラルいぶき





いぶき福祉会では4月から、9名の職員が
加わりました。
皆さん、よろしくお願いいたします。

いぶき福祉会 平成28年度 新人職員紹介



後援会員 各位

施設見学会のご案内

いぶき福祉会後援会事務局

日頃はいぶき福祉会後援会へのご理解とご協力誠にありがとうございます。さて、昨年度も開催させていただきました施設見学会を以下の日程で予定しております。これは会員の皆様に、より具体的に日々の内容をお伝えするためにいぶきの様子を実際に見てこうと企画しております。前は西部事業部のみの見学会でしたので、今回は北部事業部を中心とした見学会を予定しました。よろしければお誘いあわせのうえ、ご参加いただければありがたく存じます。お申込みはこちらの用紙をそのままファックスいただくか、メールにてご連絡をお願いします。

記

いぶき福祉会後援会施設見学会

日 時:平成28年6月8日(水)13:30～15:00

集合場所:第二いぶき(岐阜市出屋敷493)

内 容:いぶき福祉会・施設の概要の説明の後、第二いぶきの見学

問い合わせ:058-229-6464 担当:森

メールアドレス ibuki@alto.ocn.ne.jp

見学申込書

6月8日(水)の見学に申し込みます

ご氏名

ご連絡先

通信欄

申し込み先Fax:058-229-6468(通信票不要)

★第25回



いぶきふれあいまつり

テーマ

この往事で
べっないで
夢よひろがれ

日時

2016年5月22日(日)

10:00~14:00

会場

岐阜市立島小学校 島公民館

*雨天の場合は体育館で開催いたします

おみせ

フランクフルト・やきそばおにぎり・みたらし団子・カレー
うどん・衣料品・陶器 など...

踊り・音楽など楽しい企画も予定しています。

問い合わせ先

いぶきふれあいまつり実行委員会事務局(いぶき内)

☎058-233-7445 担当:古田

主催:いぶきふれあいまつり実行委員会

後援:岐阜市・岐阜市教育委員会・岐阜県社会福祉協議会・岐阜市社会福祉協議会

後援会員への新規加入・更新をよろしくお願い致します

[振込先] 郵便振替 00840-3-91146

加入者名 いぶき福祉会後援会

[年会費] 一般会員 一口 2,000円

団体会員 一口 10,000円

[お問い合わせ] いぶき福祉会後援会事務局

TEL 058-233-7445

FAX 058-232-9140

E-Mail ibuki@alto.ocn.ne.jp

(タイトルに後援会員と入れて下さい)



- 今月からオンラインでの入金もできるようになりました。

下記のアドレスからご利用いただけます。

いぶき福祉会canpan決済

<http://kessai.canpan.info/org/ibuki/>

後援会への入会はJR岐阜駅の

「ねこの約束」でも手続きしていただけます



編集後記

今号から編集方針を幾つか改めましたが、いかがでしたか。いぶきの歴史については、『いぶきの20年誌』を編集した若手職員に、歴史を学ぶ中で若手として考えたことを書いてもらいました。この試みはいづれは、詳細な『いぶき史』の作成にも繋がると考えています。仲間に関する職員の実践については、職員間でのコメントも加えてもらう形にしました。職員の相互啓発に役立ててもらいたい、という思いからです。

一番大きな記事は、職員・理事・親さんによる座談会で、今年は「親子あとのついで」を四回シリーズでお届けすることになります。「親子あとのついで」は、高齡化・疾病を含んで、という障がい児者を抱える家族にとつてのみならず、社会福祉法人いぶきの今後の運営にとつても最も深刻な問題であり、それゆえ簡単な解決策が見出せない問題について忌憚のない意見交換がなされています。まだ30〜40代の若い親さんにはもちろんのこと、後援会員の皆様にも、いぶきが現状に留まることはできないのだ、ということをお伝えできたのではないかと思います。

編集方針の変更についてだけでなく、この『夢よもつとひろがれ』全般につきまして、読んでいただいた全ての皆様からご意見を寄せていただきたと思っています。す。宜しくお願いいたします。

編集委員長 竹内章郎